

日本人喫煙者の死亡率と余命への喫煙の影響：前向きコホート研究[§]

Impact of Smoking on Mortality and Life Expectancy in Japanese Smokers: A Prospective Cohort Study

坂田 律 Paul McGale Eric J Grant 小笹晃太郎 Richard Peto Sarah C Darby

要約

目的 成人後の生涯にわたりタバコを吸い続けた人を含む大規模な日本人集団において、喫煙の総死亡率および余命への影響の大きさを調査する。

デザイン 1950年に開始された、住民を対象とした前向き研究である寿命調査。

設定 日本の広島および長崎。

対象者 27,311人の男性および40,662人の女性対象者の喫煙状況が1963–1992年に得られた。喫煙状況が最初に確認された時点の1年後から2008年1月1日までの死亡について解析した。

主な結果指標 現在と過去の喫煙者および非喫煙者における総死亡。

結果 遅い年代に生まれた喫煙者は早い年代に生まれた喫煙者より1日当たりの喫煙本数が多く、より若い頃に喫煙を開始していた傾向が見られた。1920–45年(中央値1933年)に生まれて20歳以前に喫煙を開始した男性は1日当たり平均23本、女性は17本喫煙しており、喫煙を続けた人では男女ともに総死亡率は非喫煙者の2倍以上(非喫煙者に対する率比：男性2.21[95%信頼区間1.97–2.48]、女性2.61[1.98–3.44])で、余命は約10年短かった(男性8年、女性10年)。35歳までに喫煙をやめた人は、喫煙を続けた場合の過剰なリスクのほとんどを回避することができた。45歳までに禁煙した人でもその大部分を回避することができた。

結論 これまで日本で喫煙に関連する危険性が低く報告されてきたのは、喫煙開始が遅く、1日当たりの喫煙本数も少なかった早い出生コホートの影響によるものかもしれない。他の地域と同様に日本においても、成人期早期に喫煙を開始して喫煙を続けた人は平均して約10年余命が短縮される。しかし、そのリスクの多くは35歳までに禁煙することで避けることが可能であり、35歳までに禁煙することが特に望ましい。

[§]本報告書は *BMJ* 2012; 345:e7093 (doi: 10.1136/bmj.e7093) に掲載されたものであり、その正文は同掲載論文のテキスト(英文)である。この日本語要約は、日本の読者の便宜のために放影研が作成したが、本報告書を引用し、またはその他の方法で使用するときは、同掲載論文のテキスト(英文)によるべきである。